

約 20 年前に、ある一人のプライマリ・ケア医が「日本のプライマリ・ケアでは産婦人科診療を行う必要性はない」と発した言葉が、今でも胸に深く残っている。

その後、家庭医療研修中に 13 歳初産婦の妊娠～分娩～産後ケアに携わった経験を通じて、プライマリ・ケア医がウィメンズ・ヘルスケアを行うことの醍醐味を知った。これらの相反する経験を経て、プライマリ・ケア医が日本の医療体系の中でどのようにウィメンズ・ヘルスケアに貢献できるのか、という問いに関心を深めた。

研究の入口となったのは、『日本人女性の骨盤形態』という素朴なテーマであった。このテーマを起点に、産後ケアや周産期メンタルヘルスケア、プライマリ・ケア外来での女性特有の健康問題や Patient Experience に関する研究を展開してきた。本講演では、これらの研究の概要を紹介するとともに、“問い”にどのように寄与しうのか、省察を交えて共有する。